慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	最近の新中國史學發展の概況
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.4 (1954. 11) ,p.90(588)- 96(594)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、例えば「外國人と手をつないでゆくことは、學問の發達のためにも、どうしても必要なのだ。」（一三頁）とか「こうした生活の安らぎの上にだけ、文化はさかえてゆくのである。」（二〇頁）とかいつた發言もみられ、ただに「昔の農業」についての知識を與えるだけに止まらず、もつと廣く子供達の心を溫く育くむような心組もそれとなくうかがへる。もつとも、かうした點については、人によりいろいろと是非の論があるかも知れないが、少年少女のための讀物としては一應そんなことも望まれるわけであらうし、その意味でもこれは概ね當を得た立場にあるものと考へられる。

ともあれ、庶民史科研究の專門家中井信彥氏の手で子供向のそれもわれわれの生活に最も密接な關係がありながら、それでいて比較的新しい分野の良書がここに一つ加へられたことは喜ばしいことである。いや、强いて少年少女のみに限らず、これは專攻を異にするものなら大人といへども讀んで面白く、敎へられる本だといつても過言ではなからう。幸い、卷末には〝父兄のための參考書〟として、より深く知らうと希う人々への手引も示されてゐる。行屆いたものだし、さらに挿圖も豐富で深い興味を覺えさせられる。

もし、かりに難を探せといふならば、惜しむらくは、僅かながら誤植の若干あることで、子供向の讀物であるだけに、再版では是非改めてほしいものである。

なお、本書の姉妹篇ともいふべき「昔の工業」、「昔の商業」も目下執筆中ときく。期待したい。（會田倉吉）

最近の新中國史學發展の概況

宮島貞亮

方回氏は去年十月、光明日報副刊史學第十四號紙上に「解放四年來新中國的歷史科學發展概況」の一文を揭載し、最近の新中國に於ける史學發展の概況を公にした。方回氏は如何なる士か、譯者は寡聞にして之を知ることも出來ないが、何れにせよ少壯の史學研究者であることは察知するに難くない。

最近中國は新舊に分れた。中國を愛する者にとり限りなき寂しさを感ずる。中國は永い間、その悲運に苦しみ、惱み、悶えぬいてきた。近代の文學はまさにその苦惱を如實に表はしてゐる。寔にそれは苦惱の歷史である。そしてその文學は政治に直結してゐるのが特色である。從來私共は中國の苦惱を理解することも出來ず、又理解しようともしなかつた。然し慘憺たる敗戰により目ざめた私共は、今更のやうに漸く理解しようとする意欲を持つようになつた。おそまきながら好い傾向といはなければならない。變轉きわまりなかつた中國も苦鬪の曉、漸く近代的國家になつたが、それとともに、新舊に分離するに至つた。中國にこよなく愛着を有する私共は寔に涯りなき淋しさを感ずる。中國の命運は我

が國の命運であり、又廣く亞細亞民族の命運でもある。私共は超然としてゐることはゆるされない。

何事によらず、竹のカーテン彼方の事は今日之を細さに、正しく之を知ることは困難である。私共は當分その一斑を知るだけで滿足しなければならないだらう。たまたま神田の山本書店主の好意により光明日報を手にすることが出來、全文を譯出することにした。之により彼方の史學の一斑は充分之を知ることが出來ると思ふ。斯學に志す士の御參考になれば望外の幸せである。

中國は悠久な歷史を有する國家で、幾千年來我等の英雄人民は幾多の艱難困苦を經過して光輝燦爛たる偉大な史蹟を創造し、今日も尙昂然として世界の進步した人類の最先頭を行進しつゝある。我等は世界に於て極めて豐富な物質文化と歷史文獻とを創造したのみならず、我等は史學の方面に於ても亦極めて優良な傳統を有するものである。

百年以來、我等の國家は資本主義と帝國主義との侵略を蒙り、政治上半植民地半封建的地位に沒落したため、我等の歷史と文化も亦極度の誣蔑を受くるに至つたのである。自然科學と社會科學の研究工作も之等の情勢の下にあつては、當然半植民地半封建的色彩を帶びるに至り、所謂「數典忘祖」（本分を忘れ）「認賊作文」（事實を顚倒する）を招致したので、史學の工作も例外を免れなかつた。當時胡適、蔣延黻等の連中は最適の例である。之等の祖國を賣つた「白色華人」は僞史學家の招牌を揭げて隨意に歷史の事實を顚倒し、近百年卒中國人民を奴隷視した帝國主義者（特にアメリカ帝國主義者）を認めて中國人民の友人とした。彼等の中國近代史學工作の方面に殘留した害毒は、一は史學をして現實から脫離させ、靑年を誘引して、學術のための學術として孤立した古代の歷史事實を抹殺し、一は近代の歷史事實を歪曲して帝國主義者に頌德表を上つたのである。

此に因つて、解放以前は、中國の史學工作は研究の方面と大學の歷史教育方面は、一般に都て一種の畸形的な發展を現出し、研究工作は上古の商周に偏し、近代史は外交を言ふのみで、其の他に及ばず、大學の歷史教育は都て興味より出發して科學體系と客觀要求を顧みず、或大學の如きは、歷史系に於て中國近代史の課目を設置しないほどであつた。之によつて歷史學中の基礎工作である史料の整理の如き、總合工作の歷史編纂の歷史の如きは、最も發達しない部門となつたのである。

世を擧げて、斷片的で連貫しない著作物のみで、愛國主義を見出すことも出來ず、自己の優良な傳統までも喪失したのである。

然しながら、最近數十年來我等の史學の工作は、全然白紙であつたかといへば然らず、我等の歷史、特に近代の歷史に就ては、毛主席には精到正確な分析があり、史學の工作に對し、彼は頗る

具體的な指示があり、一連の先進した史學工作者の動搖した革命時期にあつて、彼は史學の道路を開拓し、一方舊派の史學工作者中の淵博な學者連にも亦非常な好成績を擧げた者がある。

以上は、解放前中國史學工作の簡單な寫出であるが、解放後中國の史學工作は右の如き基礎から成長したものである。

一九四九年、全中國は絶大な地域に亙り解放されたが、其の後中央人民政府は科學工作方面に第一に中國科學院を成立せしめ、從來分立した中央研究院と北平研究院とを併合し、二十に近い研究所を整理した。其の中史學と關係のあるものは、考古研究所と近代史研究所である。此の二つの研究所の成立は、新中國の史學工作の將に新たな方向に出發せんとするのを說明したもので、考古研究を附屬の位置より獨立させ、將來の古代史研究を更に穩固ならしめ、物質文化史の基礎ならしめたのである。而して近代研究所の成立は、史學の工作を現實的生活中に復活せしめたもので、過去の半植民地半封建時期の實現することの出來なかつたものである。

一九四九年より一九五三年に至る僅々四年の間に於て考古、近代二個の研究所が突如成立し、漸次發達し、共に相當の成績と作用を擧げ、考古方面は安陽の發掘に着先し、商周の歷史に對して驚くべき發見があり、又國家の建設と併行して唐山、白沙、鄭州洛陽及び長沙に於て發掘工作に優良な成績を收め、戰國秦漢の歷史に多大な知識を增加せしめた。特に楚國の文化に關しては、面目を一新したと言ふことが出來るものがある。發掘工作以外に考古學報と二種の專門刊行物があり、同時に全國考古工作の指導と考古工作幹部養成との任務のために、一九五二年より五三年に亙り、文化部の社會文化事業管理局、高等教育部の北京大學は聯合して二期の考古工作人員訓練班を組織し、各大行政區の文物工作に從事した青年を召集して三ヶ月の短期訓練を行ひ、訓練終了後は從事の工作立場に歸還させ、該地方の建設と合致して文物の整理、保護工作に從事せしめ、漸次過去の反動政府時代無政府の狀態を更正せしめた。

近代史研究所も數年間に少からざる工作をなした。卽ち一團のマルクス・レーニン主義毛澤東思想の訓練を受けた一幹部を養成し、初期として集禮研究の基礎を建設し、太平天國革命運動に關する論文集の出版、范文瀾先生主編の中國近代史上冊第一分冊の改訂出版、及び范先生著作の中國通史簡編第一編等である。之等書籍の修訂と出版は、大學中學の歷史教育上相當の作用をなした。

一九四九年、中央人民政府文化部の下に文物局を設け、一九五二年、改めて社會文化事業管理局とした。其の中の博物館處と文物處とは、都て史學と密接な關係があるものである。一九四九年以後、中央人民政府は文物古蹟保護文物輸出禁止に關する法令を

陸續頒布し、同時に各行政區各省市も亦文物局、文物保管委員會を成立した。

文物重視と愛國主義教育を全國に貫徹せしめた點は、過去の反動政府の想像も出來ない處である。

一九四九年、全國解放以後に於ける史學工作も亦一種空前の大團結を見るに至つた。北京に中國新史學會成立し、一九五一年に名を改めて中國史學會とし、全國大城市、即ち天津、上海、南京開封、西安等の地方に、夫々その分會が成立した。過去の史學工作者は反動政府の壓迫、學閥及び帝國主義者の挑發と抑制を受けた結果、意見紛々、終に一の全國的の性質を帶びた組織を成立せしめることが不能であつたが、解放以後は從來史學工作者の頭上を壓迫した大山を拔去したため、郭末若、林伯渠、徐特立、范文瀾、陳垣、陳寅恪諸先生呼號の下に、全國著名の史學工作者大學の歷史教師一部分の中小學歷史教師は殆ど皆加入したのである。史學會は多數組織の下に史學各部門に對する討論と研究が行はれたが、主要なものは、中國社會發展史、中國近代史、中國境域內少數民族史と亞洲史の諸方面である。同時に北京各大學歷史系と其の他各地の力量を決定聯合して中國近代史資料叢刊の整理編輯に從事し、鴉片戰爭より始め、鴉片戰爭、太平天國、回民起義、捻軍、中佛戰爭、中日戰爭、洋務運動、義和團、戊戌變法、辛亥革命、北洋軍閥、五四運動に分ち、凡て十二段落とし、一九五一年より五三年迄に已に義和團、太平天國、回民起義、捻軍、戊戌變法等五種廿六大冊の二千萬字に近きものを出版した。其の餘の七種は一九五五年までに陸續出揃ふことが可能である。中國近代史資料叢刊の編輯と出版は、新中國史學工作者の團結を示す有力な說明で、又新中國に於ける史學の分野を示す一の鮮明な表識である。

史學工作は大學の歷史教育と密接な關係があるが、解放前の中國の大學は實質上英米大學の分校に過ぎず、大學の研究工作も亦英米大學の委托を受け、夫れが代理であり、或は資料の供給者であつたので、我等の學術も附屬的のものに沒落し、實際を離れ、枝葉の建設はあるとしても、完全獨立の體系が無かつたので、史學も此の點變りはなかつたのである。

一九四九年、解放以後中央人民政府教育部は卒先して大學課程の改革に從事し、漸次過去の半植民地半封建的教育制度を逆轉して、中國の實際の必要に適合する獨立自主の教育制度たらしむために、大學歷史系は規定して、中國通史、西洋通史、中國近代史マルクス主義歷史名著の選讀を必修課目とし、中國境域內少數民族史と亞洲史も課程に取入れ選擇課目とした。これは過去大學の歷史教育の自由散漫の現象を糾正して學生のために比較的穩健な基礎を與へたものと云ひ得る。一九五二年、全國高等學校は院系（中國科學院系統）の調整を開始し、過去の積み重ね式屋上架屋の實際に遠

い情態を一掃し、人才も亦合理的調整を行ひ、又教學計劃の根本的修訂を開始した。

全國各綜合大學歷史系の教學計劃は蘇聯莫斯科大學歷史系課程の精神を參考とし、中國の實際に結合せしめて修訂したものである。歷史系の課程を理論の修養（マルクス主義基礎、新民主主義論）製作の訓練（ロシヤ文、歷史文選）基礎課程（中國通史、中國近代史、世界通史、世界近代史、亞洲史）補助課程（原始社會史及び人類學通論、考古學通論、國際關係史）凡て四大類（體育を除外す）を基本訓練として一律に必修せしめる。これは一九四九年初期の改革に比して一大進歩を示したもので、大學歷史系の教學基礎をして更に堅實ならしめ、更に系統だつたものにさせるものである。

一九五二年、院系は初期の教學計劃の調整をした。其後一九五三年七月に至り、一學年の經驗を綜合して更に第二次の教學計劃の修訂を開始した。綜合大學歷史系方面は基本訓練部分に個別課程出席時間に稍增減ある以外に大異動はなく（新民主主義論を改めて中國革命史とし、別に中國古典文學と教育學の兩部門を增加す）此の外高等教育部の要求する綜合大學に專門化を開設する計劃であつて、研究工作と高等學校教師養成の準備條件として歷史系に七ケの專門化を設置する草案であつて、七ケの專門化は（一）中國古代史（鴉片戰爭以前）（二）中國近代史（鴉片戰爭以後五四運動に至る）（三）中國境內漢族以外諸少數民族史（四）蘇聯及び東歐諸人民民主國家史（五）米國及び其の他資本主義國家史（六）亞洲史（七）國際關係史であつて、一ケ專門化の課程を分けて（一）中心課程、專門課程、專題討論（二）史料整理、歷史編纂（三）語文訓練（四）作業實習の四類として完整した科學體系となさんとするものである。

綜合大學歷史系數學計劃の根本修訂と專門化の設置は一方面は過去の混亂且畸形的發展の終止を目標とし、一方面は解放後は自由獨立發展に向つて新たな努力の方向を指示したものである。これは史學工作の舊中國より新中國に進行する一の重要な轉移點であり、當然亦史學工作者の光榮あり且至難巨大な任務である。

以上述べた處は解放後新中國史學發展の幾多重要な方面である。此の外中共中央新疆分局の新疆（特に南疆）社會に對する調査の如きは、中國社會發展史の研究上重大な意義を有するものである。全國で此の類のものは少くないが、茲に一一詳述しない。

解放以後の新中國は、僅々四年の期間に於て政治經濟文化の各方面に都て絶大な變化を見るに至り、全體國家として半植民地半封建的統治を脱却して、自由獨立の道程に登るに至り、一九五三年に五年經濟建設計劃が開始され、社會主義に向て邁進した。鴉片戰爭以來、中國は帝國主義蹂躪の下に展轉困苦し、時を歷ること百年、今に至つて重ねて自由を獲るに至つた。凡そ祖國の歷史を

熱愛し、良心を有する者は、新中國の出現に對して歡喜鼓舞しないものは無い。一九四九年十月一日、中華人民共和國成立を宣告し、毛主席が天安門上にて公告を宣讀し「中國の人民は立ち上つた」と云はれた時、全國の人民は無上の興奮を感じたのである。歴史は政治性最强の一部門の科學である。史學工作者は第一に新中國自由獨立の呼氣を感じた者である。

解放以來、史學工作者も自發的に過去の思想努力を批判して自己を改造した。一九四九年、北京解放久しからずして、行年七十の史學者陳垣先生は、彼が胡適に與へた公開信を發表して、かの胡適等數人に對する憎惡と新中國に對する熱愛を表示した。而して齡六十を逾ゆる馮友蘭先生は、數年來絶へず彼自身過去の錯誤志想と其の受けた實驗主義歴史觀點の危害を檢討し批判した。これは新中國史學工作者の自己改造の二つの最も典型的な例であつて、之に依て其の他を概見すべきである。

以上解放後四年來の新中國の史學工作に對して鳥瞰式報道を試みたが、當然遺漏又は不完全な點があることは免れない。然し只四年來史學工作者が祖國の建設と一致して、穩健に一の新しい方向に轉入したことにつき、以上簡單な叙述に依つて何等かの消息を見出すことは出來るであらう。只此の四年間に亙る史學工作の發展は全然缺點無しとはしない。自分個人の意見として其の缺點は以下述ぶる幾方面に亙つて示すことにする。

第一、指導の不强力、不明確。史學工作の結局はどの方面より指導さるべきものであるが、これに就ては一般の史學工作に從事する者の念頭にあるもので、其の言ふ所に從へば、當然中國科學院の指導すべき所であるが、科學院は現在考古と近代史の二個の研究所あるのみで、全面的歴史研究所の世話役として何等成立を見ない。中國史學會は曾て史學工作者の團結に就ては多少の働きはしたが、一九五二年以後は消息を斷ち、默々として何等聞く所がない。故に此の所數年來の史學工作は、無組織無指導或は有名無實の中に時日を經過したものである。

第二、自由討論と批評。自己批判を行ふ風潮の發生を見ない。解放後四年來の史學工作は自由討論と批評と自己批判に就て其の表現が沈默甚しと言ひ得る。武訓の問題、宋景詩の問題の如きは凡て文藝界から發動したもので、史學工作者として討論に參加したものは極めて少數である。中國古代史の分期問題、奴隷社會と封建社會問題の如き、史學上解決すべき必要があるにも拘らず、何等の討論もなく、數篇の文章のあつた後は、何等聞くところもなく、恰も何にか顧慮する點あるやに思はれる。畢竟何の顧慮する所か、自由討論と批評及び自己批判の風潮が發生しなければ學術の進歩向上は到底不可能である。

第三、全面的史學の刊行物なし。

現在史學工作と關係ある刊行物は、只、文史哲歴史教學、新史學

通訊、と光明日報の史學副刊等の數種に過ぎない。此の數種は都て彼自體の條件の制限を受けて全面的史學の刊行物たり難いものである。科學院は考古學報を出版したが史學集刊は停刊とのことである。故に史學工作は定期出版物としては比較的寂寞の觀がある。無組織、無指導と自由討論、批評、自己批判なき狀況の下で沈鬱な空氣の中にあつては、史學工作者の熱情を窒息せしめ、全面的刊行物の出版は之を望むことの出來ないことは必然の勢である。

第四、各大學の歷史系に聯絡缺乏す。

史學工作は以上言ふ所の三種の情況の下では、各人獨自の工作をするのみで、各大學の歷史系は自己の問題にのみ沒頭し、所謂「小國寡民彼此不相往來」で史學工作の自流現象を發生し、又サボタージュとも言ひ得るものである。以上の四方面は相互關係のもので、組織なく、指導なくしては、容易に力量の發揮は望むことも出來ず、從て自由討論出版物刊行などは至難である。

解放後四年來新中國の史學工作の成績は肯定すべきであらうが、また其の缺點も亦承認すべきものである。只我等は此の種の現象を認めて、發展過程の途上、當然のことと思惟するものである。我等は確信す「マルクス」主義と毛澤東思想指導の下にあつて、自己の豐富な歷史文獻と優良な傳統に依據し、熱心に薛聯先輩の經驗、有組織、良指導を學び、あらゆる史學工作者を團結して自由討論と批評、自己批判の風潮を樹立すれば、必ずや史學を活動させ、祖國の建設に合致して彼自身の光輝を發揮するであらう。

一九五三年九月二十五日　北京に於て

方　回

シリング神父の業蹟(*)

はしがき

これはアルチーボ・イベロ―アメリカーノ誌四三號（Archivo Ibero-Americano, 1951, año XI, julio-Septiembre núm 43.）三四三―三五七頁に掲載されたオドルフォ・シェーファー（Odulfo Schäfer）とアントリン・アバー（Antolin Abad）兩神父（フランシスコ會）の共同執筆にかかる El P. Doroteo Schilling, O. F. M., Misionero y Misiorólogo（宣教師、宣教學者なるフランシスコ會員ドロテオ・シリング神父）を譯出したものである。本稿は二部に分れ、最初にシリング師の傳記、次に著作目錄（講演、未刊書も含む）を附して成立つてゐる。スペインの戰後刊行の日本史關係の資料を整理してゐるうちに、この譯出を企てた。傳記の項は幸、全譯が可能であつたが、ビブリオグラフィーの項は紙面の都合から講演を除いたものの中、更に日本關係のものと小論掲